

直島からの手紙 第一信

前略 みなさま

早いもので、直島に住むようになって十一年が過ぎようとしています。そのうちの七年間、直島町教育委員会にいることになります。そして、五年前から地域総合調査研究事業でみなさんとフィールドワークなどをともにする機会を得ました。今回、みなさんから直島へのお便りをいただき、感謝しています。返事が遅くなりましたがことをお許しください。

先日は、ようやく埋蔵文化財センターで「直島」展をみることができ、渡邊さんから詳しく展示の内容をご説明いただきました。これまでの直島での調査が、瀬戸内のどのような背景に位置づけられるのかが示されていました。展示をしながらこの五年間のけしきが想起され、また多くの関係者のみなさんの顔が浮かびます。

驚くかもしれません、直島にいると、直島が離島であることをしばし忘れて暮らしていることに気づきます。波の音もカモメの鳴き声も、海に近づかなければ聞こえません。かろうじて、朝夕に直島(本村)港に発着する定期小型船のエンジン音が遠くで聞こえる程度です。なので、週末に子どもの習い事の送りや買い出しに島外へ向かうことがなければ、直島が群島のなかにあることを忘れているのです。

十一月半ばに入り、ようやく瀬戸内国際芸術祭が終わりました。期間中にいくつか回り、直島とは別の離島を訪ねる新鮮さを味わいました。会場となる離島は、船着場へ降り立ってすぐに民家の入口となるような風景が印象的で、集落も点在していくように感じました。一方直島は、つねに観光客を乗せたバスや自転車が往来し、宮浦・本村・積浦の三つの集落も一本道でつながっています。定期便のカーフェリーが発着する港周りも奥行きがあるため、民家との距離に余裕があるように感じます。他を知るからこそ、みえるけしきがあることを、みなさんとのフィールドワークで学びました。

向島の北の入り江では、水を飲みに山を降りてきた巨大な猪にはばったり出くわし、お互いに驚いて逃げました。足もとの岩礁に気を配りながら、そろそろと海岸線を歩いていると、ふいに

玉野から来たシーカヤックのおじさんが海上に現れ、何をしているのかと逆に尋ねられたりしました。

離島は、いわば登ることのできる山でした。ハイキングのように尾根筋を渡り歩き、標高の高い井島の一本松古墳からは、直島本島の三菱マテリアルの紅白の煙突が眼下にみました。海上をゆっくりと新幹線車両を何本ものせた船が東へ向かうを眺めたのもこのときでした。牛ヶ首島では藪のなかを、荒神島では急斜面を登りきれずに立ち往生し、京ノ上臘島ではほふく前進でイバラだらけの段々畠跡をよじ登りました。寺島の断崖絶壁の山頂は、いまにも崩れそうで足がすくみました。真冬の土砂降りの家島を、震えながらみんなで歩きましたね。直島本島でも、ふだん入ることのない山のなかで蜂に追い出されるなど、手つかずの自然や動物と遭遇してきました。離島を歩いた夜に風呂へ入ると、足じゅうみたことのない小さな傷だらけだったのを思い出します。

少し長くなってしまいました。

直島の群島を歩けば、たいてい浜伝いのルートで、あつとうまに一周できる島もありました。島の地形や植物、地面の質もその多くは、砂、石、岩、草、木、藪、雨でえぐれた山肌、道なき道や動物のぬた場などでした。直島本島からはみえない、広大な草原や外海が広がるけしきもありました。そして離島の丘や山を登ると、遠くにみたことのない角度の直島本島がみえるのです。このまま迎えの船が来なかつたらどうやって帰るのか、そんなことを無人島で考えるときがありました。

遠くにみえる直島は、定期航路からみるふだんの直島とは違い、目的地としてはじめから線でつながってはいない、唐突に、ただの山のようにはぶつんと島と島のあいだに浮かんでおり、その昔の姿をしばし想像していました。

早々

直島町教育委員会 大岸 法隆 拝



左から、向島、(奥)直島、局島、京ノ上臘島 井島大浦台遺跡付近



まるでプラレール！ 井島一本松古墳から